

## 伯耆大山における眺望景観からみた信仰の場の立地環境特性

Visual Characteristics of Settings of the Religious Places in Mt. Daisen

小野 良平\*

Ryohei ONO

**Abstract:** A case study was conducted to discuss landscape settings of historic religious places as their visual relationships with surrounding environment. Mt. Daisen (Tottori pref., 1729m), where is known as one of “Reizan (sacred mountains)”, has been developed by temples and shrines on its north-west mountainside since ancient ages. Including their access roads from other regions, visual relationships of the religious places and surrounding environment was surveyed using DEM and viewshed analyses. First, visual target areas, where were assessed as significant views from the religious places, were identified. Then, high visibility areas to the target areas were extracted, and the relation with the location of religious places were investigated. As the results, strong correspondence of high visibility areas to the targets and the religious places’ setting was observed. The results show that the settings of historic religious places have visual connection with their surroundings. And they inspire the discussion that the landscape what we can see from there could be not a result of the past development, but a contributing factor of the development. The results also suggest the necessity of rethinking of landscape planning at Reizan, where are nowadays likely to be designated as national park.

**Keywords:** Mt. Daisen, scared mountain, landscape, visibility, setting, natural park

**キーワード:** 伯耆大山, 霊山, 景観, 可視性, 立地環境, 自然公園

### 1. 背景および目的

中国地方の最高峰である鳥取県の大山(伯耆大山, 標高 1729m)は, 山岳修験の霊地として知られる, いわゆる「霊山」の代表的な存在である<sup>1)</sup>。その信仰の拠点は山の北西側中腹部に立地する大山寺および大神山神社であるが, これらは中世から神仏習合の権現信仰の場として長い歴史を有し, 近世には「大山寺」を名乗ったものが明治の神仏分離令で「大神山神社(旧社格:国幣小社)」となり, のち大山寺も復活されたものである。

現在, 大山寺および大神山神社を訪れると, その登り坂の参道からは, 大山の山頂部を構成する火山活動で形成された北壁を右手奥に, ほぼ正面手前に溶岩ドームの三鉾峰等を仰ぎ見る(写真-1)。参道からのこうした景観は, 山を遥拝する日本の信仰空間に比較的多くみられる特徴として理解することができる。その一方で参詣の帰路, この参道を反対方向に歩けば, その正面には円弧をなす弓ヶ浜と美保湾を遠く下方に望む印象深い景観を体験できる(写真-2)。この海への景観はここに大山寺が開かれたことによってもたらされた偶然の結果なのであろうか。これが本研究のきっかけとなる問いである。

信仰に限らず, 文化や生活の蓄積がある場所においてそこから何が見えるかという眺望景観の問題は, 単純な眺めの良し悪しではなく, その場での人々と周囲の自然環境等との関わり方の表れとみることができ, 地域や土地の価値を捉える観点の一つとして

意義があると考えられる。このうち社寺等の信仰の場における景観に関しては, 集落毎に神社を調査し, 社殿の配置方向に表れた遥拝行為に注目し, 山を中心にその他海や川等に向けられた遥拝の構造を考察した研究<sup>2)</sup>がみられる。さらには著名な山岳を対象に, それらが神体山等としてどのような視覚関係で観られているかを分析した研究<sup>3)</sup>も注目される。本研究も両研究に通ずる関心を有するが, これらが神社や山岳を対象として, 特定の視方向を前提にした上でその視覚体験を景観として分析しているのに対し, 本研究では霊山とはいいながらも山岳への視覚関係に限定せず, 周囲の自然との関わりの中にそこに信仰の場が成り立つ立地環境(セッティング)を景観として捉えることをねらいとする。これに関しては日常生活圏における景観について, 沿岸部集落の立地特性を海の可視性との関わりから調査した研究<sup>4)</sup>や, また考古学の観点から, 遺跡や古墳などの立地をそこからの可視領域との関係から捉えた研究<sup>5)</sup>などがみられ, 数値地図を用いて解析を行うその手法等が参考になる。

加えて霊山の景観が注目されるのは, 現状として多くの霊山が国立公園など自然公園に含まれているからである。大山一帯も制度創設期の昭和 11 年(1936)に国立公園に指定されている(現・大山隠岐国立公園)。現在その公園価値の説明は, 地形・地質, 動物, 植物, 文化など多面的ながらも個別の観点の提示に留まっておらず<sup>6)</sup>, 霊山という自然と一続きの文化的価値への言及は少ない。本研究は一事例に対する検討に留まるが, 仮に霊山としての人と自然の関係性が捉え得るならば, その観点は自然公園全般の資源価値の再評価にも有用となる可能性が期待される。

以上を踏まえて本研究は, 霊山である伯耆大山に関わる信仰の場を事例として, 具体的には大山寺・大神山神社とその周辺地域およびこれに至る参詣道・参道を対象に, それらの場所における眺望景観からその立地環境の特性を明らかにすることを目的とする。その上で霊山の景観価値を現代の自然公園等において活かす可能性についても考察を加える。



写真-1 大山寺参道より大山 写真-2 同参道より弓ヶ浜

\*立教大学観光学部

## 2. 研究の方法

研究の基本的な流れは、まず大山寺・大神山神社の諸施設群とその参詣道・参道（これらを「信仰の場」とする<sup>7)</sup>）から見える周辺環境のうち、信仰に関わる重要な眺望対象と考えられる指標的な地物を設定し、次にその可視領域を網羅的に検索し、これと信仰の場の立地との関係を検討するものである。解析は数値標高モデルの利用を基本とし、具体的には以下の方法をとった。

最初に、指標となる眺望対象を冒頭の間に沿って直ちに参道から見る大山と弓ヶ浜に確定するのではなく、社寺境内とその参詣道・参道という、広がりのある領域のどこからの眺望が妥当かを考慮しつつその対象となる地物を設定した。ここではその最も簡便な方法として、大山信仰の場として核心的存在といえる<sup>8)</sup>、かつて智明大権現と呼ばれ、明治以降は大神山神社奥宮とされた社殿位置からの景観を基準とした。加えて史資料も参照しその景観認識の特徴を考慮し、眺望対象の地物を特定することとした。

図-1は国土地理院の10mDEM<sup>9)</sup>を用いて、GIS (ArcMap10)により大神山神社奥宮からの可視領域を抽出したものである。冒頭に挙げた参道からの景観と概ね同様に、南側に大山の北壁を間近に見上げ、北西方面は遠方まで弓ヶ浜、美保湾等を望む位置に奥宮が立地していることがわかる。その信仰上の意味を史資料から確認するために、近世までに制作された大山とその周辺の景観を描いた図画を広く収集した。その結果、線引きされた領域内のみを描いた国絵図や寺領図を除いた景観全体が理解できるものとして、中世の絵図『大山寺縁起絵巻』(図-2)<sup>10)</sup>および近世の絵図『伯州大山略絵図』(図-3)<sup>11)</sup>の2点が確認された。前者は絵巻名に示されるように、また後者は図中大山寺境内が大きく描かれていることからみても、ともに大山の信仰空間を表象した絵図といえる。両図ともに日本海側からの架空の視点より大山の北面および弓ヶ浜・島根半島が描かれているが、ともに弓ヶ浜については、画面手前中央へ明確に描かれ、また浜というよりも、いわゆる国引き神話との関連も指摘されるような<sup>12)</sup>海に突き出した半島として捉えられていることが窺え、弓ヶ浜半島の重要性が確認される。これらの検討より、大山の信仰に関わる指標的な眺望対象となる地物を、大山北面および弓ヶ浜半島に設定した<sup>13)</sup>。

次にこれらに対するDEMによる可視領域解析作業を実施するために、大山北面と弓ヶ浜半島のそれぞれの地表面に視対象としての目標点を設定した。その基本的な考え方は、山肌や半島上の一点が見えるだけでは山や半島としては認識されないことを考慮し、それぞれがその地形の特徴に対応した姿形で視認されるよう、複数の目標点群を設定することである。

山が山らしく認識されるには、その山の山頂から一定の下方までの連坦した山体が見える必要があると考えられる。これに関連し、富士山の風景写真を対象に山頂付近の見えの重要性を構図論として定量的に分析した既往研究<sup>14)</sup>がみられるものの、多様な姿

形の山岳一般に対して、山らしい見えの構図について汎用性のある条件の設定は容易ではない。また可視領域の検討が目的であるので視距離も考慮する必要がある。そこで本研究では簡便な方法として、ある視点から、山頂付近のある山腹上の地点が可視であれば、その視方向においてはそれより上方の山頂に至る地表面の可視性も高いと考えられる<sup>15)</sup>ため、この山頂に至る山肌の鉛直方向の見かけ上の幅が見やすい大きさかどうか、すなわち山頂付近の鉛直方向の山体の見込み角を指標に用いることとした。具体的には、視程の目視観測に際して適用される目標物の大きさに求められる条件として用いられる、視角 $0.5^\circ \sim 5^\circ$ という基準<sup>16)</sup>を参考にした。大山山頂から弓ヶ浜半島の付根に相当する米子市街地までの距離がおおよそ20kmであるが、この時に比高200mの対象物は鉛直方向で $0.6^\circ$ 程度の視角となることからこれを目安とし、標高1700m余の大山の北面に対し、山頂から約200m下方の標高1500m地点に目標点を置くこととした。水平方向にも幅が必要であるので、地形図上で1500m等高線に沿って、山頂付近の「弥山」、「剣ヶ峰」、「天狗ヶ峰」の各峰から北側に降りる細かい尾根筋上に3点をまず設定し、さらにこれらを挟むように北壁の西端部尾根上の点および東端部（「三鉢峰」に相当）の点を加えた計5点を大山北面の目標点群と設定した(図-4参照)。

一方で弓ヶ浜半島については、半島が半島らしく認識されるのは、その水際の輪郭、つまり浜の形状が視認されることといえる。しかし知られる通り、弓ヶ浜半島は砂州として発達したものであり、加えて近世には付近の山地で盛んに営まれた、たたら製鉄にともなう鉄穴(かん)の流しにより、大量の土砂が美保湾に注ぐ日野川から海に供給され、砂州の変化が特に顕著であった<sup>17)</sup>。従って現在の水際線を目標点とすることには問題が多い。そこで本研究では、比較的浜に近く、近世初期でのその存在が確認でき、かつその後移転の記録が知られていない神社を歴史的に変化の少ない地点とみなし、半島の東西両側にそれぞれ半島付根部、中央部、先端部近くから計6社を選定し、その位置計6点を半島の目標点群とした(図-5参照)。

そのうえで分析作業として、以上設定された大山北面の5目標点、弓ヶ浜半島上の6目標点に対し、視程も考慮して大山を中心に約60km四方程度の範囲において、これらを視認できる土地の網羅的検索、すなわち可視領域の解析を行った(作業上は上記目標点を視点とした可視頻度解析と同等のものである)。そして大山北面の可視領域、弓ヶ浜半島の可視領域をそれぞれ可視頻度として抽出したのち、両者の共通部分、すなわち大山北面と弓ヶ浜半島の両方が見える可視領域を抽出した。

そしてこの結果に対してまず広域的な観点から、歴史的な大山への参詣道のルートとの関係を検討し、次いで大山寺・大神山神社周辺域について、参道、塔頭諸院、社殿等の立地との関係を検討し、最後にこれら結果に考察を加えた。

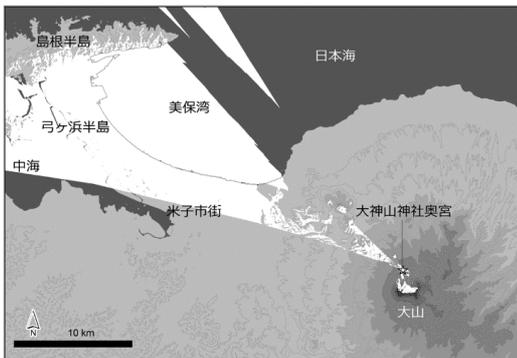


図-1 大神山神社奥宮からの可視領域(白色部)

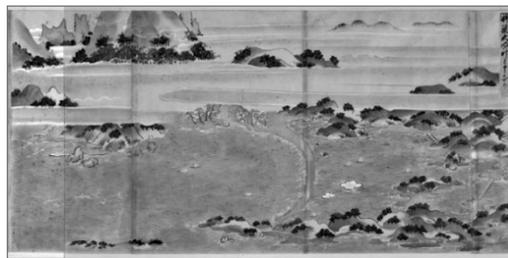


図-2 『大山寺縁起絵巻上巻』(模本)より  
(東京国立博物館デジタルコンテンツ・原本は14c末)



図-3 『伯州大山略絵図』  
(文献11所収・江戸後期)

図-2,3とも上方に大山、中央下部に弓ヶ浜半島が描かれる。

なお、本研究は霊山の歴史と文化に関わる景観の価値を現代に活かす風景計画論的立場に立ち、中世から近世以降現代に繋がる景観の実態に関心を置くものであるが、厳密な過去の景観の復元・考証を目指すものではない。地形データは現代のものを使用するが、実際には先述のとおり浜は変化し、また山頂付近も崩落が続いている。しかし本対象地の場合是有史以降の火山活動等による劇的な地形変化は起きておらず、また部分的な発掘調査等で得られる以外に広域での過去の正確な地形の把握が困難な中で、広域の可視領域の分析にあたり現代のデータを用いることはその欠点を超える利点があると考え。また可視性には植生の影響も当然あるが、計画論の立場からは地形に比べて格段に変動性や操作性の高い植生の問題は留保し得るものとする。

### 3. 結果

図-4は、大山北面の可視領域として、目標点5点に対し、それらが一度連坦して見える必要性を考慮し、過半の3点以上が可視である領域を示す。北面を望むエリアとしては米子市街、弓ヶ浜半島、島根半島(図外)、および大山北西麓などが該当する。なお大山は伯耆富士の呼称もある通り、西側から望むと富士山に似た姿形であり、北面以外にも目標点を定めれば西側、南側を含めさらに広いエリアから見ることのできる山岳である。

次に図-5は、弓ヶ浜半島の可視領域の結果である。半島がその長軸方向の奥行きを一定程度保ちながら認識されるように見える必要性を考慮し、短軸方向の近接する目標点2点のみが見えるケースが含まれないよう、目標点6点に対し3点以上が可視である領域を抽出した。そのまとまったエリアは一部を除く大山の西麓

から北麓にかけてであり、そのほか狭い可視領域が散在している。

そして両者を合成した、つまり大山北面が見え、かつ弓ヶ浜半島が見える(ともに目標点3点以上)エリアを示したものが図-6である。両者それぞれの可視領域の広さに比べて、その両者を同時に望むことができる土地の領域はかなり限定的であることがわかる。ここに近世までに確立していた、周辺からの参詣道のルート(一部推定含む)<sup>18)</sup>を重ねてみると、最大の都市部である米子方面からの参詣道(尾高道)と、この可視領域の範囲に関連性があることが窺える。

図-7はその部分拡大図である。米子方面からの尾高道に対して、北麓からアプローチする坊領道が合流して大山寺・大神山神社の参道に至るが、尾高道だけでなく坊領道についてもその両道の合流部付近では、大山北面・弓ヶ浜半島双方の可視エリアであることがわかる。さらに尾高道のルートは、延長10km程度に渡り、そのかなり狭い範囲においても重なるように、大山北面・弓ヶ浜半島双方の可視領域を通っていることが窺える。

以上を踏まえると、広域的にみれば、大山の参詣道の一部ではあるが、そのルートは大山北面と弓ヶ浜半島その双方を眺望可能な立地環境にあったことがわかる。そしてそれは連続性を持っており、冒頭に挙げた参道における眺望への疑問は、少なくともその場限りの特異な景観ではなく、参詣道上で継起的に体験される景観であったということができる。

続いて大山寺・大神山神社周辺域についてさらに詳しく検討したものが図-8である。近世の絵図(図-9)とも比較しながら諸空間の立地状況を検討すると、尾高道、坊領道の合流に対応するようにやや狭まった可視領域上の最奥に、核心的施設である大神

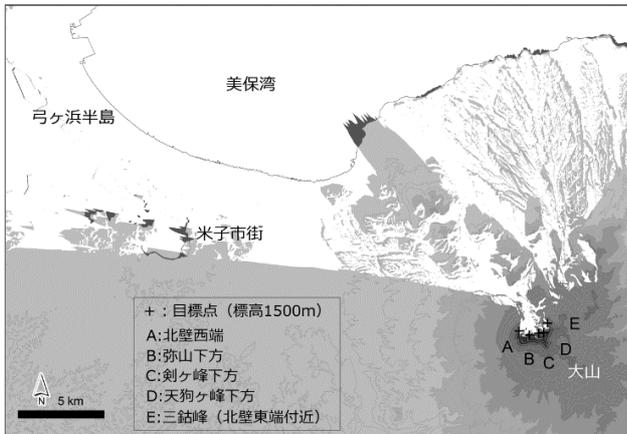


図-4 大山北面の可視領域(白色部・5目標点中3点以上)

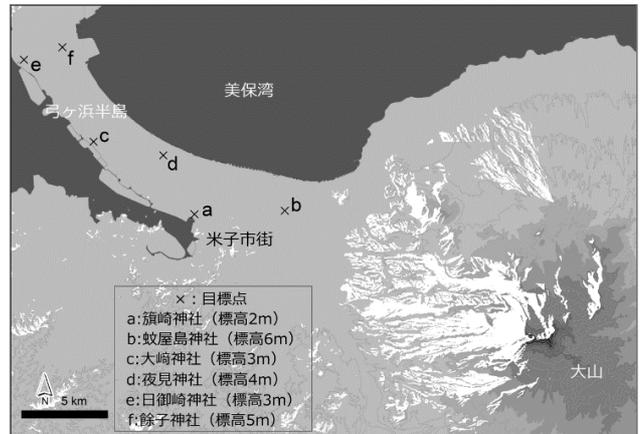


図-5 弓ヶ浜半島の可視領域(白色部・6目標点中3点以上)

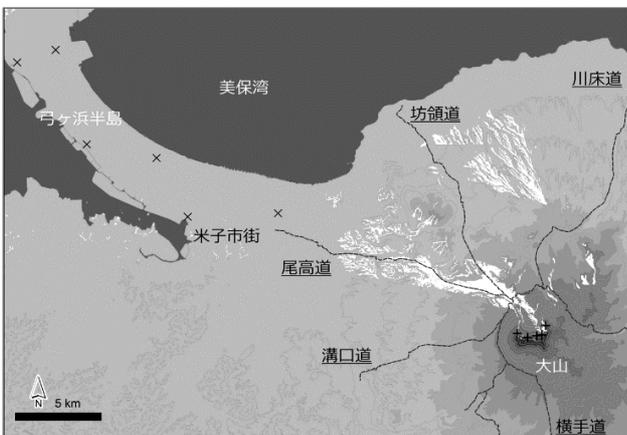


図-6 大山北面かつ弓ヶ浜半島の可視領域(白色部)と参詣道(大山北面は5目標点中3点以上、弓ヶ浜半島は6目標点中3点以上)

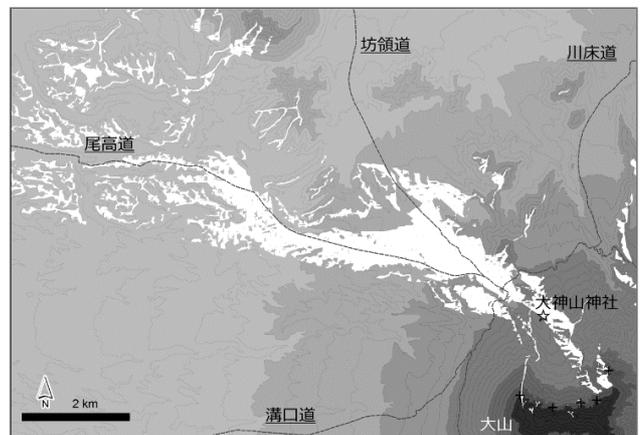


図-7 左図部分拡大図

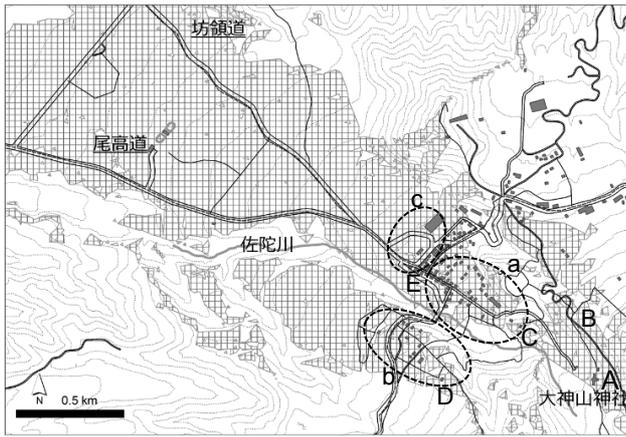


図-8 大山寺・大神山神社周辺域における大山北面かつ弓ヶ浜半島の可視領域（網掛け部）

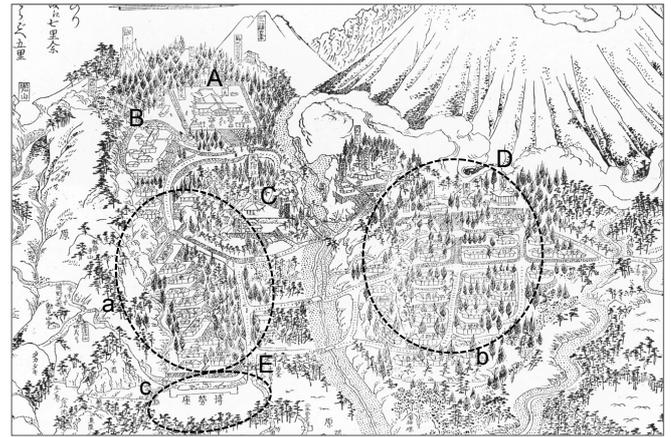


図-9 『伯州大山略絵図』<sup>11)</sup> 大山寺・大神山神社周辺域（一部加筆）

図-8, 9 共通凡例 A: 大神山神社 (旧智明大権現) B: 本坊 (西楽院) 跡 C: 大山寺本堂 (旧大日堂) D: 阿弥陀堂 E: 銅鳥居跡  
a: 塔頭諸院跡 (中門院) b: 塔頭諸院跡 (西明院) c: 博労座 (牛馬市) 跡

山神社 (旧智明大権現), その手前に本坊 (西楽院) 跡, 現在の大山寺本堂などの主要施設が建ち, そこから参道に沿った銅鳥居跡一帯が可視領域上に立地することがわかる。また谷を形成する佐陀川の対岸にはやはり可視領域の最奥に大山信仰上重要な阿弥陀堂が建つ。さらに両岸には近世時多くの坊舎が並ぶ塔頭諸院のエリアがあったが, これも可視領域と対応した立地である。加えて銅鳥居跡の手前の可視領域は, 国立公園化されるまで続いていたという<sup>19)</sup>博労座 (牛馬市) の場所であった。これは参詣地を超えてこの場所が大衆の交流の場となっていたことも示す。

これらのことから, 大山信仰に関わる参詣道の一部一定区間, そして参道から塔頭諸院を含む境内域の多くが大山北面と弓ヶ浜半島の双方を望む立地環境であったことが明らかとなった。

#### 4. 考察

冒頭の問いに戻れば, 参道からの大山と弓ヶ浜への景観が, 信仰の場の広がりに対応して共通する景観であったことが認められたことで, 少なくともそれを偶然の結果と断じることは難しく, さらにその景観がここに信仰の場が開かれた「結果」ではなく, むしろ「要因」の一つであった可能性も考察しうる。もちろんその因果関係までは根拠が不足し判断できない。しかし例えば日常的集住の場において, そこからの景観が集住の結果ではなく一要因であった可能性が指摘される<sup>20)</sup>と同様に, 信仰の場の成立や存続と周囲の景観には強い関係があった可能性が示唆される。

いずれにしても本事例において, 長い歴史の中で人々が大山と弓ヶ浜を眼にしながらか参詣道や参道を往き還りしてきたこと, 聖職者達が同様の景観とともに暮らしてきたことが確かめられたことで, 人々にこのような景観体験を通して成り立った地域への認識があったと考えることは無理がない。そしてこの立地環境は現在なお継続しているのであるから, この特性を風景計画論的に土地資源等の評価に活かすことは考慮に値すると思われる。本事例の場合その具体例が国立公園の価値評価にあるといえる。

大山隠岐国立公園の価値は, 先述した利用者への説明だけでなく, 公園計画においても地形地質や植生等の自然景観, 社寺の文化(的)景観・文化環境, レクリエーションな眺望, などが個別に評価され, 保護規制計画や利用施設計画に反映されている<sup>21)</sup>。また近年政府が挺入れする「国立公園満喫プロジェクト」においては, 大山寺から弓ヶ浜方面への眺望の記載はあるもののその歴史や文化との繋がりに言及はない<sup>22)</sup>。本研究を通して, それら自然, 文化, 眺望など独立的に捉えられている自然公園の価値が,

霊山の歴史においては一体のものであった可能性が高いことが示された。それが眼に見える景観として今なお表れているならば, その景観は地域の魅力をより引き出す公園計画へ反映が可能であり, またその考え方は他事例にも展開し得るのではないだろうか。

謝辞: 本研究はJSPS 科研費 JP17K02134 の助成による。

#### 補注及び引用文献

- 1) 宮家準 (2004): 霊山と日本人: 日本放送出版協会, 119-120
- 2) 上田篤 (2003): 鎮守の森の物語: 思文閣出版, 297pp
- 3) 齋藤朝 (2006): 名山へのまなざし: 講談社, 248pp
- 4) 小野良平 (2017): 三陸沿岸域における集落と海の視覚的つながり: ランドスケープ研究 80(5), 585-588
- 5) 寺村裕史 (2014): 景観考古学の方法と実践: 同成社, 97-129
- 6) 環境省 (2018): 大山隠岐国立公園リーフレット (日本語)
- 7) 本研究での「信仰の場」は開山に関わり人為的に開発された土地の領域とし, 修行の場ではあるが自然状態に近い山頂等は含まない。また「参詣道」と「参道」の違いは, 旧銅鳥居跡の地点 (現在のバス等駐車場付近) より上方の現大山寺に向かう直線的道を「参道」, 銅鳥居跡までの地域外からのアクセス路を「参詣道」とする。
- 8) 下村章雄 (1966): 大山史話: トミタ高速写真印刷社, 49-51
- 9) 国土地理院・基盤地図情報 <<https://www.gsi.go.jp/kiban/index.html>>
- 10) 東京国立博物館デジタルコンテンツ 天保2年 (1831) 写 原本応永2 (1395) 年 <<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0047195>>, 2019.05.21 参照
- 11) 山下和正 (1998): 地図で説く江戸時代: 柏書房, 256-257 所収
- 12) 岩鼻通明 (2019): 絵図と映像にみる山岳信仰: 海青社, 7-29
- 13) 島根半島は弓ヶ浜半島への眺望に包含し得る対象と考察指標は設定しなかった。
- 14) 横塚智亮, 齋藤朝 (2002): 岡田紅腸の富士山風景写真にみる山頂付近の露出傾度分析: 都市計画 51(5), 50-57
- 15) 実際には目標点-山頂間の細かな地形次第で不可視となる地表面はあるが, 全体としては上昇する斜面に向かってある点が見えればそこから上方も見るといえる。
- 16) 篠原修編・景観デザイン研究会 (1998): 景観用語事典: 彰国社, 44-45
- 17) 楳原京子, 今泉俊文 (2003): 弓ヶ浜半島の完新世における地形発達と海岸線変化: 山梨大学教育人間科学部紀要 5(1), 1-22
- 18) 鳥取県教育委員会 (1991): 大山道・歴史の道調査報告書, 50pp
- 19) 下村前掲書 8), 12-14
- 20) 小野前掲論文 4)
- 21) 環境省 (2014): 大山隠岐国立公園 (大山嶽山地域) 公園計画書, 61pp
- 22) 大山隠岐国立公園満喫プロジェクト地域協議会 (2018): 大山隠岐国立公園ステップアッププログラム 2020, 100pp

(2019.9.28受付, 2020.3.30受理)